

【論文】

大阪市立自然史博物館における市民参加の歴史的検討 (2) —長居公園移転以降—

The History of Citizens' Participation at Osaka Museum of Natural History (2)

瀧 端 真理子*
Mariko TAKIBATA

Abstract

This article examines the history of citizens' participation at Osaka Museum of Natural History from 1974 to 2002. As the museum moved from Utubo to Nagai Park, museum professionals hoped that "Museum Friends" would be a beginners' group. At the same time, they organized study circles that were expected to do research.

Some of study circles led by Isamu Hiura published lists of collections about Entomology. Many members of the study circles donated their specimens to the museum, and became influential members of the council of "Museum Friends."

There are a meeting room, a conference room and a practice room in the museum, and citizens can use them free of charge. It is those rooms that have played important roles in adult and community education.

The membership of "Museum Friends" increased gradually from the late 1970's to the early 1990's, as the council members worked hard and managed well. Some citizens began to organize a new independent research group and proposed a series of events of the "Museum Friends," after they worked with museum professionals. Other citizen began to even extend his activities to the school education and the local community.

Since the late 1990's, it was not council members but the museum professionals that mainly led the activities of the "Museum Friends," because most of the council members became busy with their own work as office workers or teachers. Now the museum professionals also make use of the mailing list that can also be used by many naturalists as well as the members of "Museum Friends."

It is worthy of notice whether the founding of Center for Natural History, Osaka in 2001 can change the extent that citizens can participate in museum activities.

* 追手門学院大学人間学部

平成15年1月15日受理

1. はじめに

本稿の目的は、前稿¹⁾に引き続き、大阪市立自然史博物館の沿革を事例として、博物館における市民参加の問題を歴史的に検討することである。

現在の行政改革路線下、博物館も地域社会への貢献度が問われ、市民参加の問題が論じられている。しかし不足する資源を補うための市民参加（安上がりの人材確保としてのボランティアやコレクションの吸い上げ）論に立脚するのではなく、利用者本位の博物館という観点から既存の国内博物館での活動について体系的に考察した研究は、故伊藤寿朗の諸論考²⁾以外には、ほとんど行なわれていない。

一方、戦後日本の博物館世界を担ってきた関係者の高齢化が進んでおり、現在聞き取り調査及び資料の収集を行っておかないと基本的なデータが失われる可能性が高いため、調査の緊急性は高い。

伊藤の市民参加に関する考察は、「第三世代の博物館」論及び「地域博物館論」として類型化されている。前稿で記した通り、伊藤は、竹内順一が着想した「第三世代の博物館」論に、1986～1991年当時に実際に存在した博物館活動を重ね合わせることで、博物館の理想像を提案していった。

1986年の段階で、伊藤が第三世代の新しい試みの蓄積として取り上げたのは、「①宮城県美術館創作室のワーク・ショップ、②大阪市立自然史博物館、東京都高尾自然科学博物館その他の館における、市民参加の地域共同調査・共同研究、③府中市立郷土博物館の市民への研究委託と展示室の開放、④平塚市博物館のフィールドを明記した条例や紀要の開放、年報の市民への開放など」であった。

一方、伊藤は地域博物館について「地域博物館という考え方は、もともとは、国立の大型館などとは異なる、中小博物館の自己主張であった」と述べ、その着想のヒントが柴田敏隆（横須賀市博物館）と日浦勇（大阪市立自然科学博物館）の著作であったことを明かしている³⁾。1976年開館の平塚市博物館の実践と相俟って、伊藤の「地域博物館論」は、その主張が明確に形成されてゆく。

伊藤の「市民参加」論の中心となる「第三世代の博物館」論と「地域博物館論」の着想に大きな影響を与えた博物館活動の一つが、大阪市立自然史博物館（旧・大阪市立自然科学博物館）であることは確実に

あるが、大阪の事例に関し、伊藤は、日浦の著作及び日浦を中心とする市民参加の地域共同調査・共同研究の特に目立つ事柄のみを拾い上げ、理論構築したのではないかと、という疑問が持たれる。また、伊藤の没後10年を経て、「第三世代の博物館」の先進的事例として同じく取り上げられた東京都高尾自然科学博物館が、現在存廃の危機に立たされていること⁴⁾、横須賀市自然・人文博物館（旧・横須賀市博物館）が市民との関係構築に多くの困難を抱えていること⁵⁾などから、伊藤が取り上げた複数モデル館の通時的・共時的比較は、博物館における市民参加の問題を検討する上で、今後避けて通れない課題と言えよう。

前稿で筆者は、大阪市立自然科学博物館時代（1950年～1974年3月）の「市民」の実態（属性）及び参加の諸相を時系列的に解明してきた。前稿では長居公園での新館オープンまでの大阪市立自然科学博物館時代を扱ったため、本稿では新館オープン・館名変更（1974年4月）以降現在までの大阪市立自然史博物館の活動への市民参加の実態を明らかにする。この作業によって、伊藤の大阪市立自然史博物館に対する評価の当否を検討するとともに、今後予定している伊藤モデルとなった他館との比較研究の基礎資料を蓄積したい。また、伊藤理論と一旦切り離して、理想や願望として「市民参加」を語る以前に、現実に日本の博物館においてこれまでにどのような市民参加が実現されてきたのか、その実現を支える条件は何なのかを明らかにする、その基礎作業としたい。

2. 「友の会」の性格と博物館との関係

大阪市立自然史博物館においては、「友の会」が常に博物館の教育普及活動の中心に位置付けられてきた。1974年の「友の会」への名称変更の事情は、館報9では「本会の会員数も1,000名を越え、同好会的な役割は館員が指導あるいは参加・協力するサークル等がうけもち、本会は、博物館をうまく利用し、これから勉強をしようとする人達の会としての性格が強まってきたため、名称を自然史博物館友の会と改めた」と説明されている⁶⁾。

友の会会長は、1973年逝去した三木茂の後任として粉川昭平大阪市立大学理学部教授が迎えられ、副会長には、館創設以来の役員であった岡田康稔評議員が選出された。旧館時代からの評議員の多くが退

任し（評議員数は会長・副会長を除いて、1974年度17名、1975年度19名、1976年度11名）、若手中心の評議員構成となった。1976年度の館報7には「今年度は評議員の一部交代があり、友の会の運営についても、いろいろと討論がされた。・・・当館の場合、

研究的要素の強い面は、友の会とは別に学芸員が指導、あるいは参加する研究サークルが分担し、館としては、そのサークルの育成をはかるという姿勢をもってきた。したがって友の会は、博物館に一番近い人達、あるいは博物館を一番うまく利用している

表1 友の会会員数および友の会主催行事への参加者数一覧

会員数集計年月日	会員数	行事への参加者(延べ人数)	出典	友の会の主な出来事	合宿先
1974.12.31	1368	友の会行事なし	館報6	普及センターにて館出版物・自然史関係書籍販売	
1975.12.31	1142	41+α	館報6	総会後に懇談会開く	
1976.12.31	1078	53	館報7	評議員の一部交替・友の会運営について討論あり。積極的に会員増をはかるとの計画はない	
1977.12.31	991	222	館報8		金剛山
1978.12.31	1066	322	館報9	中・高校生物クラブへの宣伝等で会員増	和佐又山
1979.12.31	1133	206	館報10	総会後バザーを行う	氷ノ山
1980.12.31	1245	144	館報10	総会時に行事参加回数の多い会員を表彰	能勢
1981年末	1269		館報11	「カプトエビ調査」の成果を第8回特別展「河内平野の生いたち」に展示	和佐又山
1982年末	1285		館報11		雪彦山
1983年度末	1095	307	館報12		友ヶ島
1984年度末	1300	424	館報12	半年会員制度を設ける	洞川～稲村ヶ岳
1985年度末	1268	502	館報13	岡田副会長・谷評議員退任	芦生
1986年度末	1324	445	館報13	総会昼食時にブタ汁・ヤミ汁を提供。月例ハイキングの開始。(財)日本生命財団の事業助成により、双眼実体顕微鏡6台、マイクロメーター等購入	恩原高原
1987年度末	1373	705	館報14	大会時に会員のスライド大会を行う。「リーフレット集No.3」製本、発行。シンボルマーク決定	奥伊吹
1988年度末	1372	640	館報14	「大阪の自然 生物編」「標本づくり」「自然観察地図」刊行。友の会として調査研究事業(淀川の昆虫を調べる会)に取り組む	石川県白峰山
1989	1485	623	館報15	「収蔵資料目録ー日本産花粉の標徴」「絵はがき」刊行。友の会グッズ委員会を設置(ラスターバッジの作成)。親と子の「昆虫採集入門講座」開始	新宮市高田
1990	1641	871	館報16	「長居公園の雑草」刊行	和佐又山
1991	1764	994+α	館報17	「秋のつどい」開催。フィールドノートの刊行。N.S.の紙質をアート紙に変更。第1・7号の表紙をカラー印刷	有明海
1992	1897	1552	館報18	「秋のつどい」「底曳網の生物観察会佐野漁港」開催。「リーフレット集No.4」製本、刊行	長良川
1993	1872	1261	館報19	友の会規約の改定、会費を2,000円から3,000円に値上げ。評議員・学芸員全員で「自然観察地図」増補改訂版の執筆	大江山
1994	1814	1256	館報20	4/1より友の会の事務員、大阪教育振興公社の嘱託職員となる。家族会員証を発行。「自然観察地図」増補改訂版を発行。Tシャツの製作・販売	美里町
1995	1758	973	館報21	バンダナ2種類の製作。補助スタッフ制度の受託。ナガスクジラの骨の発掘	蒜山高原
1996	1912	1032	館報22	N.S.500号記念事業として総目次作成作業、編集を完了。前年度・前々年度退会者への再入会呼びかけで会員増	南アルプスしらびそ高原
1997	1833	828	館報23	「Nature Study総目次301～500号」刊行、全会員に配布。「フロッピーディスク版総目次」刊行	まきの高原
1998	1922	1062+家族	館報24	勧誘のためのリーフレット作成・配布。「セミのぬげがらしらべ・鞆公園」、秋のつどい「大阪湾まるごとトレイル引き網」開催。友の会経営問題検討委員会開催	淡路島
1999	2058	777名+家族	館報25	友の会経営問題検討委員会にて、1999年度から会計を2部制度に改める方針決定。新・自然観察地図の作成	西表島
2000	1952	873名+家族	館報26	友の会特定非営利活動法人格取得について検討	大江山
2001	1866	1182名+家族	N.S.48-3	「NOP法人大阪自然史センター」発足	対馬
2002.12.24 現在	1943		和田学芸員のHP	友の会規約改正(友の会をNPO法人大阪自然史センターの事業組織とする)	氷ノ山

注) 友の会会計年度は1月1日から12月31日までである(規約第8条)。また友の会の個人会員は、友の会主催行事に家族同伴で参加できる(規約第7条)ため、友の会会員数は世帯数である。

人達の会という性格をもっている。博物館の側から見ても、あるいは利用者の側から見ても、博物館普及活動の第一線に位置するものであろう。館主催の行事の場合も友の会会員は、参加者の多数を占めており、館員の側は行事参加者のイメージを友の会にだぶらせて計画・準備をすすめる事ができる」と書かれている⁸⁾。以上の記述から、友の会は初心者を中心とする普及事業の対象と捉えられ、研究的側面は友の会とは一線を画したサークル活動で深めていこうとする方針を読み取ることが出来る。評議員層の若返りは、会議に出席して意見を述べるだけではなく実際に動けるメンバーへの入れ替えであったと推測される。

友の会会員数や友の会主催行事への参加者数の推移は、表1の通りであり、会員数や行事参加者数が増えていった経緯については、4節を中心に後述する。1976～1978年の3年間は、友の会入会・更新時にアンケート調査が行なわれ、その集計結果が館報に掲載されている。ここでは、会員の階層に関しては、学校大学勤務が団体会員を除く全会員の27.8% (1977年)、28.8% (1978年) を占め、会員の性別は、男84.9% : 女15.1% (1977年)、男84.4% : 女15.6% (1978年) であり、大阪府下を中心とする20歳台から40歳台の男性、学校大学勤務者が多いという長居での新館オープン当時の会員像が明らかになっている⁹⁾。

友の会発行の会誌である『Nature Study』の編集作業は、戦時代に引き続き学芸員の手によってなされてきた¹⁰⁾。長居移転以降 (1974年5・6月合併号～2002年12月号まで) に掲載された個人別単著記事の総本数は2,312本で、これを著者別に集計したものが表2である。上位14位までを館長経験者を含む学芸員が占め、長居時代の個人別単著記事総本数の48.3% に当たる1,118本が新旧学芸員 (計24名) によって書かれている。その一方で、学芸員以外の単著記事寄稿者及び団体は770名・団体にも上っており、博物館を支える人材の豊かさを物語っている。

大阪市立自然史博物館の出版物には、『大阪市立自然史博物館研究報告』『自然史研究』『収蔵資料目録』『展示解説』『大阪市立自然史博物館館報』がある。これらの館出版物を含めた中で、他館との出版物の交換で一番人気が高いのは、友の会発行の『Nature

表2 長居時代の『Nature Study』
(1974年5・6月合併号～2002年12月号)
掲載個人(団体)別単著記事本数一覧

人名	単著記事総数	注記
宮武頼夫	156	学芸員→館長
岡本素治	111	学芸員
藤井伸二	108	友の会評議員 →学芸員
日浦勇	90	学芸員
樽野博幸	80	学芸員
山西良平	80	学芸員
石井久夫	64	学芸員
布谷知夫	53	学芸員
那須孝徳	51	学芸員→館長
柴田保彦	39	学芸員→館長
川端清司	35	学芸員
金沢至	34	学芸員
初宿成彦	34	学芸員
和田岳	31	学芸員
桂孝次郎	30	友の会評議員
市川顕彦	27	
瀬戸剛	27	学芸員
両角芳郎	22	学芸員
布村昇	21	学芸員
塚腰実	21	学芸員
加納康嗣	20	館職員→友の 会会計監査
藤井俊夫	19	友の会評議員
波戸岡清峰	18	学芸員
中野東男	16	
立澤史郎	16	
大宮文彦	15	
中谷憲一	15	
鍋島靖信	15	友の会評議員
山崎一夫	14	
高槻公害問題研究会	14	
八木剛	14	友の会評議員
春澤圭太郎	13	友の会評議員
富永修	13	
佐久間大輔	13	学芸員
河上康子	13	
西川喜朗	12	友の会評議員 →会長
村井貴史	12	友の会評議員
有山啓之	11	
白木江都子	11	友の会評議員
河合正人	11	
北畑雅弘	11	
岡田美恵子	10	
北元敏夫	10	
永井かな	10	
瀬戸淳	10	
梅原徹	10	友の会評議員

Study』である¹¹⁾。『Nature Study』は友の会の会費収入に基づく出版物であるが、創刊当初から館行事の広報の中心的媒体でもあった。以上の点から見て、友

の会会員は『Nature Study』の記事執筆や編集に関して博物館側に依存する度合いが強く、逆に博物館は友の会から幾分かの財政的支援を受けていると解釈できよう。この博物館と友の会の関係は、「もたれ合い」とも「共生関係」とも表現しうるものである。

ところで、長居の新館では入口横に広いスペースを取って、オープンカウンター式の普及センターが設置された。展示解説書・絵葉書・資料目録等の販売が行われ、「友の会」事務所もこの普及センター内に置かれて友の会事務局員が仕事をし、学芸員が輪番制で普及センターに座り、市民からの専門的な質問に応じる体制を取った。また、旧館時代から学芸員が関係してきた研究会やサークルが無料で使用できる集会室（定員48名）・会議室（22名）・実習室（31

名）が設けられ、有料ではあるが講堂（266名）も設けられた¹²。

学芸員は研究サークルを組織したり、学会等研究団体の事務局機能を担ってきた。これらの会や大阪周辺自然関係団体の無料の学習・集会の場として、博物館の集会室・会議室・実習室が有効に機能してきた。表3～5に各室の利用状況を示しているが、1974年度から2000年度までの各室の利用者概数（利用申し込みの際に記入された数字）は、集会室24,419名、会議室8,354名、実習室6,734名である。公民館が未設置の大阪市内にあって、博物館のこれらの部屋が市民の学習の場として果たしてきた役割は非常に大きいと言えよう。

表3 集会室利用状況（1974年度～2000年度）
上位29団体

団体名	利用者概数
関西トンボ談話会	3035
近畿植物同好会関係	1871
阪神わかやま野尻湖友の会関係	1581
日本甲虫学会関係	1400
種子植物談話会	980
地学団体研究会大阪支部関係	951
シダとコケ談話会	702
日本昆虫学会関係	690
日本鱗翅学会近畿支部関係	520
日本野鳥の会大阪支部	452
大阪府高校生物教育研究会関係	434
かもしかの会関係	425
大阪市立自然史博物館友の会	278
大阪鳥類研究グループ関係	245
大阪湾海岸生物研究会	240
野尻湖花粉グループ関係	225
緑と教育を考える会関係	225
日本シダの会 関西談話会	210
大阪府立学校環境緑化研究会	210
富田林市石川化石発掘調査団	209
日本自然保護協会関西支部	200
日本第四紀学会	200
双翅目談話会	200
自然保護教育研究会	170
大阪自然環境保全協会	160
関西自然保護機構	160
中学校理科教育講座	151
野尻湖昆虫グループ	150
大阪昆虫同好会	150

注) 集会室の利用者総数（概数）は延べ24,419人。なお表3～5の集計に際しては館報6～26を利用した。概数としたのは、館報記載の数字が利用申し込みの際の数字であるため。

表4 会議室利用状況（1974年度～2000年度）
上位17団体

団体名	利用者概数
石友会関係	877
種子植物談話会	510
自然史博物館友の会	462
大阪昆虫同好会	455
近畿版鳥類レッドデータブック研究会	340
関西トンボ談話会	334
近畿地学会	325
近畿版レッドデータブック研究会	325
昆虫情報処理研究会関係	273
大阪湾海岸生物研究グループ	239
近畿植物同好会	235
日本第四紀学会	200
大阪鳥類研究グループ関係	145
しだとこけ談話会	135
自然保護教育研究会	130
かもしかの会関係	115
野尻湖花粉グループ	100

注) 会議室の利用者総数（概数）は延べ8,354人。

表5 実習室利用状況（1974年度～2000年度）
上位12団体

団体名	利用者概数
野尻湖花粉・植物グループ	1555
阪神わかやま野尻湖友の会関係	1052
野尻湖昆虫グループ	892
大阪市立自然史博物館友の会	566
大阪自然環境保全協会	541
大阪鳥類研究グループ関係	341
大阪湾海岸生物研究会	223
日本第四紀学会	200
種子植物談話会	156
大阪府高校生物教育研究会関係	141
ナチュラリスト講座	120
野尻湖ヴィーナスグループ	104

注) 実習室の利用者総数（概数）は延べ6,734人。

3. サークル活動の源泉と多層的展開

1970年代後半、日浦勇学芸員は「サークルを生み出し、育てよ¹³⁾」「一人が一つのサークルを持って¹⁴⁾」と後輩学芸員たちに語っていた。日浦のサークル活動の源泉は、日浦が博物館に採用される以前の徳島時代にある。1955年に九州大学農学部を卒業した日浦は、郷里の徳島で溝口修や西岡靖夫らと「徳島昆虫団体研究会」を発足させた。この会の結成は、「地学団体研究会」の理念に触発されたものであり、1957年に博物館に就職した日浦は、先に大阪に転居していた溝口らと「昆虫団体研究会」を継続し、1959年には溝口修・溝口重夫と3人で「ギフチョウ研究グループ」を結成した¹⁵⁾。

1962年、日浦は西日本のアマチュア研究者23名に通知を出し、うち15名の出席を得て、4月に「関西トンボ談話会」の発足集会を持った。当初の世話役は日浦であり、1964年、事務局は津田滋のもとへ移動、さらに井上清、尾花茂らが中心メンバーとなり、1967年からは中学生時代から日浦のもとに通っていた谷幸三が事務局を引き受けた¹⁶⁾。関西トンボ談話会は、主力メンバーがひととおりトンボ全種を同定できるようになった時、なにもすることがないような錯覚にとらわれ、会の危機を迎えた¹⁷⁾。日浦は1970年に会誌『gracile』に、「こうして大きく成長してくるにつれ、私たちの談話会の体内に、微妙な生理的変化が生まれてきました。近畿地方のトンボの基礎資料を作ろうとする動き、そして若い人への啓蒙と、老人の再勉強のために解説講座を連続してやろうとする動き、の二つがそれです」と記している¹⁸⁾。この談話会は1973年末で会員数88名になっており、1974～1977年にかけて館の収蔵資料目録第6～9集として『近畿地方のトンボ』第1～4部を刊行し、私有標本を館に寄贈してきた¹⁹⁾。

1971年に、日浦は「近畿オサムシ研究グループ」を結成した。オサムシ研究について、日浦は「筆者は研究条件のわるい職場でも進められるテーマとして、分布の成立過程論をえらび、はじめにオサムシを材料にして分化絶対年代の推定をこころみた。・・・オサムシについては、目下6名ほどでグループ研究を行っている」と綴っている²⁰⁾。

このグループは、谷幸三・富永修・桂孝次郎・春澤圭太郎・土井仲治郎の5名が日浦の研究をサポー

トする形のメンバー限定型のグループであった。研究の基礎となるオサムシの広範囲に亘る分布データを一人で集めるのは大変なことであり、メンバーは手分けして各地にオサムシ掘りに出かけた。一人では集めきれないデータを皆で集めるのは楽しい、と谷は語る²¹⁾。この「近畿オサムシ研究グループ」は館報6では、次のように記されている²²⁾。

昭和40年に発表した日浦の論文「金剛生駒山脈のオオオサムシ属」を批判的に克服するための研究グループが昭和46年4月に結成された。香里園におけるトウヨウ象発掘が契機であった。メンバー6名（うち4名は大学生であったが現在いずれも社会人）同年11月までに個人の持っていたデータを集めて「近畿地方におけるオサムシの地理的分布（予報）」を研究報告25号に発表した。その後東は濃尾平野～糸魚川から西は岡山・四国一円の分布調査を行なうとともに、生活史の研究と平行して、現在の分布圏が生活をとおして形成されるプロセスを解明することに努力している。昭和50年からまとめの段階に入り、終了すればこれまで閉鎖的だったグループを別の形態に発展させることを意図している。調査にもなって得られた標本はすべて館に寄贈され、館の収集事業に貢献している。

1979年には館の収蔵資料目録第11集として近畿オサムシ研究グループ編『近畿地方のオサムシ』が発行された²³⁾。近畿オサムシ研究グループは、2000年に曾田貞滋によって「1970年代に、日浦さんをリーダーとするオサムシ研究者のグループは、誰もが予想もしなかった新亜種を発見したり、近縁種の間交雑帯を見つけたりして、日本のオサムシ研究に多大な貢献を残した」と評価されている²⁴⁾。

1975年の『Nature Study』3月号には、「大阪海洋生物研究グループ」の「大阪湾岩礁海岸動物相(1)―1974年における海岸のようす―」が掲載された。大阪海洋生物研究グループは布村昇学芸員が中心になり、中嶋康裕・宇坪直子・井上淑美・福井康夫の5名で組織され、報国積善会等の財政的援助を受けながら、これまで博物館では手付かずであった海産無脊椎動物の生物相調査に着手していた²⁵⁾。

1976年6月からの1年間、(財)日本自然保護協会関西支部は、大阪府農林部自然保護課から「金剛・生駒山地及和泉山脈の環境保全調査(学術調査)」を受託した。日本自然保護協会関西支部は筒井嘉隆初代館長の時代から大阪市立自然科学博物館に事務局が置かれており、筒井の退職後は千地万造館長が事務局を引き受けていた。当時の支部は寄付金を集めるための窓口であり、また、博物館では直接受託することのできない調査活動の受け皿となっていた。この調査には博物館学芸員11名が関わるとともに、館周辺のメンバーが参加している。昆虫関係では、日浦を含む「近畿オサムシ研究グループ」全員及び「関西トンボ談話会」の吉村俊彦・今田哲信が調査にあたった。また布村は宇坪・中嶋・福井らと一緒に岩礁海岸動物相の調査をまとめた²⁶。また、「近畿オサムシ研究グループ」は、1978年にまとめられた同じく大阪府農林部自然保護課から日本自然保護協会関西支部が受託した『北摂山系自然環境保全調査(学術調査)』の調査も担当した²⁷。

布谷知夫学芸員は、この1976年の調査では森林調査を一人で担当したが、調査の人手がないので困った。日浦は「一人が一つのサークルを持つべきだ」と言っていたが、他分野の学芸員には、そのようなものが出来るのだろうか、との思いもあった。布谷は、1977年「大阪の森をいっしょに調べてみませんか」という募集記事を『Nature Study』3月号に掲載、以後、集まったメンバーで勉強会と野外調査を行い、その成果を「大阪の森林研究グループ」名で発表した。会は会員制ではなく、調査のまとめに参加した布谷を含む10名の名前が掲載されている。会員制にしなかった理由は、どんな人が来るか分からなかったこと、メンバーに特にあてがあったわけではなく森が好きな人が調査を行うその時その場所に来てくれればよい、と考えたためであり、ゆるやかな会が組織された²⁸。

「阪神わかやま野尻湖友の会」の事務局を担当した那須孝悌学芸員は、1977年、「花粉形態の学習会」(のちの野尻湖花粉グループ)を立ち上げた。植物分類のことを何も知らない人たちを対象に、月1回朝から夕方まで、遅刻厳禁で花粉分析のトレーニングを行った²⁹。

日浦は1976年以来「野尻湖昆虫グループ」の結成

準備を進め、1978年、野尻湖発掘調査(第7次湖底発掘)に、日浦・宮武頼夫学芸員・衣笠弘直・加納康嗣・桂の5名が初めて参加した。この発掘で6点の昆虫化石が見つかり、この発掘のあと正式に、野尻湖発掘調査団の中の専門組織として「野尻湖昆虫グループ」が発足した。野尻湖昆虫グループやその中の「ネクイハムシ・アトラス班」は、「近畿オサムシ研究グループ」メンバーがそのまま移行して主力メンバーを形成していた³⁰。また、1978年には昆虫研究室に集う愛好者・研究者の間で直翅類研究グループが結成され、連絡誌『ぼったりぎす』が毎月発行された。1983年2月には50号に達し、会員数は70数名になっていた。1983年3月には、日浦・宮武とグループの主として大阪周辺在住の会員15名が協力し、館の収蔵資料目録第15集『日本の直翅類』を作成した³¹。

岡本素治学芸員は、1978年『Nature Study』2月号に、「植物スケッチクラブの御案内」を掲載した。「参加資格は植物の好きな人、好きになりたい人なら誰でも」とされ、毎月、植物園案内の行事の翌日に会を設定した³²。植物園案内は、瀬戸剛学芸員を中心に1975年4月以降、隣接する長居植物園内で毎月1回行われており、植物の勉強がしたい常連的な人々の集まりであった。岡本による植物スケッチクラブの提案は、この植物園案内の取り組みの中から生まれてきたアイデアであった。1978年4月から、第4日曜日に月1回開かれた植物スケッチクラブの参加者は、岡本の共同研究者になる田代貢や北島(旧姓楨山)浅子の他、のちに友の会評議員になる藤井俊夫・藤井伸二・土井恵子・左木山祝一らを含む32名でスタートした³³。

「1981年5月24日春日山での観察会以後岡本さんが海外出張となり、細々と自主運営を続けるも、力尽きて自然解散してしまいました。最後はよくおぼえていません。ただ僕が植物をじっくり見ようとすする大きな動機づけをしてくれたことはまちがいありません」と田代は振り返る。一方、岡本はスケッチクラブを「サークル」という意識で捉えてはおらず、参加者にきっちりまかせて世話役もやらせる、という組織としての意識はなかった。毎回スケッチの材料を準備するのは大変で、1982年以降スケッチクラブを再開しようという意識はなく、むしろ各自で材

料を取ってきて分からないところは質問してくれればいい、手取り足取りは3年やったらもういいのではないか、と考え、その後もメンバーとの付き合いを続けている。参加者の側は行事の延長と受け止めて受動的であり、各自が能動的に動くのは難しかった、と田代は振り返る。

日浦は岡本の始めた「植物スケッチクラブ」の様子を「サークル」と捉えて、日浦周辺のすでに成熟していたこれまでのサークルとは別に、新たに人を集め勉強するきっかけにしようと考え、1979年、博物館の普及行事として「大阪の昆虫を調べる会」を立ち上げた³⁴。布村の後任として着任した山西良平学芸員は、1979年の暮れ、「自分たちの手で力をあわせて海岸生物の状態を継続的に調査していこうという趣旨」で「大阪湾海岸生物研究会」を発足させ、「中学卒業以上の方なら誰でも、研究歴の有無を問わず、会員になれます」と呼びかけた³⁵。

1980年当時、日浦は『博物館研究』誌上で、新館建設後、資料の寄贈の申し出が相次ぎ、処理能力が追いつかなくなったとし、「このような事態は、寄贈者としての市民と、受贈者としての博物館が、寄贈・受贈関係以外には交渉をもたない、隔離された存在であるというような固定観念では解決できないように思う」と述べている。日浦は「サークルの研究がある水準に達すると、昆虫学のような博物誌レベルでの調査が遅れた分野では多数の標本に基づいて形態学、分類学、生物地理学、変異論などにアプローチする必要が早晩生まれてくる。この段階で、サークル・メンバーに博物館の集積資料が勉強の絶好の材料となるわけである。もし館の資料が未整理であれば、彼らに整理を手伝ってもらったら良いのではないか」と記した³⁶。

表6に示す通り、1970年代後半には、日浦率いる昆虫研究室を中心としてさまざまな新しい研究会やサークル活動が生まれ、その基礎を築いた会もあれば、ある程度の目的を果たし解消されていった会もあった。日浦自身はアマチュアたちを自立した研究者として育て、館の資料整理を手伝ってもらうことを射程に入れていた。中心となった学芸員の考え方や、会ごとの目的の違いによってその組織や活動形態も様々であり、このことが博物館周辺のアマチュア層にとって多くの選択肢をもたらしていたと考え

表6 博物館関連研究会およびサークルの創設年一覧

年	研究会・サークル名
1962	関西トシボ談話会
1971	近畿オサムシ研究グループ
1975	大阪海洋生物研究グループ・阪神わかやま野尻湖友の会
1977	大阪の森林研究グループ・花粉形態の学習会（現・野尻湖花粉グループ）
1978	動植物民俗探検会・野尻湖昆虫グループ・直翅類研究グループ（現・日本直翅類学会）・植物スケッチクラブ
1979	大阪の昆虫を調べる会・大阪湾海岸生物研究会
1981	友の会カプトエビ調査団
1982	摂津昆虫調査会
1983	大阪のアサギマダラを調べる会（現・アサギマダラを調べる会）
1988	淀川の昆虫を調べ、平野にすむ虫の起源と分化の歴史を考える会（仮称）
1990	鞆公園自然探究グループ
1992	昆虫情報処理研究会
1996	鳥の勉強会・双翅目談話会
1997	大阪鳥類研究グループ
2001	ジュニア自然史クラブ
2002	友の会読書サークルBooks

られる。またこの時期に、学芸員たちと活動をともにしたメンバーの中から友の会評議員の大半が生まれていったのである。

4. 活発な友の会活動と日浦勇学芸員の死去

1977年8月には、長居移転後初めて、5年ぶりに友の会の泊りがけ観察会が金剛山で行われ、参加者は50名、博物館から日浦・岡本・布谷が、評議員では谷・桂・道盛正樹が付き添った³⁷。1978年6月には桂の呼びかけで、友の会の行事として「カプトエビの観察会」が開かれ、桂の指導、谷・道盛の世話で42名が参加、博物館南側の東住吉区矢田部西通に点在する水田を6班に分かれて調査した³⁸。『Nature Study』1981年5月号には、「いっしょに準備しませんか 特別展 河内平野の自然と生いたち」の広報が掲載され、「私たち友の会でも、博物館の特別展に発表するために河内平野の田んぼにいるカプトエビ（2種）の分布をくわしく調べようということになりました」と記して、3回以上調査に参加できる有志を募っている³⁹。この試みは、日浦の言葉を引用するならば、博物館の展示活動に「市民」と共にあることを取り入れた初めての試みであった⁴⁰。中学生会員村井貴史や高校1年で参加した吉村協三は富永の

書いた冗談まじりの会報「えびぞる情報」が楽しかったことや、1日車で回る調査の驚きを報告している⁴¹。調査団のメンバーは日曜日ごとに「カブトエビ調査大作戦」を繰り広げ、車に分乗して調査し、471地点でのデータを残した。「カブトエビ調査団」は、館の特別展で、カブトエビ・ホウネンエビ・カイエビの分布図を報告し、1985～87年には「水田の生き物—1981年カブトエビ調査の副産物—」として、カブトエビ以外のさまざまな生物も一緒に調べ、『Nature Study』に4回にわたって記事を掲載した⁴²。

1983年4月には「友の会ハイキング」（多武峰）が行われ、野草を探して食べたりゲームをする行事に72名が参加した⁴³。この行事は大変好評だったため、翌1984年4月の「春のハイキング」（河内長野市天見）では野草料理を前面に押し出したところ、170名もの参加申し込みがあった⁴⁴。

『Nature Study』1983年6月号に日浦はアサギマダラの移動の謎を紹介し、「大阪のアサギマダラを調べる会」の結成を呼びかけた⁴⁵。日浦は1982年冬から単独でアサギマダラの調査を始め、1983年7月、金剛山で行われた「第1回アサギマダラを調べる会」に集まったのは日浦・宮武を含め10名であった。参加者の中にチョウの研究者は一人もおらず、ただマーキングがおもしろそうだとか、アサギマダラというチョウにはまだお目にかかったことがない、という人たちが大半を占めていた。日浦は手書きの通信『I Love アサギマダラ情報』を作り、マーキングの方法や食草の見分け方を記した。「I love」となっていたのを竹本卓哉が「We love」と言って、NO.4からは『We Love アサギマダラ情報』と名称を変更した。その10/17号（NO.7）の末尾にはY. Mの署名で、次の記事が掲載された⁴⁶。

さようなら！日浦さん！皆さんといっしょにアサギマダラの調査をしながら日浦さんはせつせと「アサギマダラ情報」を出されていましたが、ついにこの号を作ってこの世を去ってしまわれました。10月17日(月)に1人で金剛山にアサギマダラの没姿調査に出かけられ午後6時半ごろ帰宅されたそうです。それからすぐか、あるいは夕食後にせつせと「アサギマダラ情報」を作られたようです。告別式が終わった後で奥さ

んからこの刷下をいただいた時涙を禁じえませんでした。

NO.6とNO.7のこのページの上1/3までしあげてからほかの原稿を夜通し書かれ午前3時半に急性心不全で帰らぬ人となってしまいました。

『We Love アサギマダラ情報』NO.8は加納がピンチヒッターで編集して10/23に発行、NO.9からは竹本卓哉が引き継いだ。NO.9の表紙には、「We Love 日浦さん」と書かれ、次のように記されている⁴⁷。

1983年10月23日、日浦さんが逝かれてから5日後、宮武さんと共に、日頃、日浦さんの足を引っぱっていた、どうしようもないオサ研⁴⁸、バッテリーギス⁴⁹、生昆⁵⁰のお兄さん達と大阪のアサギマダラを調べる会有志が、追悼金剛登山へ行って来ました。日浦さんは生前、コブシの木を愛されていたので、金剛山のてっぺんにあって、しかも大和、河内両側を臨める場所にそびえる大きなコブシの木の前で、ささやかな追悼式を行いました。愛煙家はいつも以上にプカプカやりましたし、勿論、コブシの木に酒をかけました。

『Nature Study』は11月号に日浦の訃報、12月号は「日浦勇学芸員追悼号」、翌1984年1月号にも7本の追悼文を掲載、また遺稿出版についての募金を呼びかけた。この募金には1,000人近くの協力があり、1984年10月には蒼樹書房から日高敏隆他・編『蝶分布と系統—日浦勇選集—』、「日浦さんの遺稿を出版する会」から『日浦勇著作集』が出版された。『日浦勇著作集』はすぐに売切れ、再刊された。また、1985年には特別陳列「自然観察への招待—ナチュラリスト・日浦さんに学ぶ—」が開催されたが、この展示は、日浦にゆかりの深い関西トンボ談話会・近畿オサムシ研究グループ・直翅類研究グループ・高槻公害問題研究会・ピエリス研究グループ・イチモンジセセリ研究会・野尻湖昆虫グループ・大阪のアサギマダラを調べる会によって完成されたものであった⁵¹。

『Nature Study』1984年5月号には、高校2年生に

なっていた村井が大阪のアサギマダラを調べる会を代表して「1983年のアサギマダラ調査の成果」を発表し、83年12月～84年5月の与喜山調査には、会創設時のメンバーの他に、谷・加納・桂・河合・土井・冨永ら日浦にゆかりの深い人々が調査に加わった⁵²。

1984年、後援会創設以来の評議員で『Nature Study』の初代編集長でもあった岡田康稔友の会副会長と、日浦の一番弟子であった谷が、評議員会の席上口論となり、双方とも評議員を退任、1985年度総会で、後任の副会長に西川喜朗が選出された⁵³。

友の会では1985年3月に、道盛らによって「炭焼きの見学」が実施され、62名が参加、1985年11月には、会員から希望の多かった「草木染め」の行事を実行、会員の安井叔子が講師になり、定員30名の計画に対し84名の申し込みがあり、2回に分けて実施された。1986年6月には、「底引き網の生物を見る会」が、鍋島靖信らによって泉佐野魚協で行われた⁵⁴。また1986年8月～10月には「第13回特別展 大阪湾の自然」が開催された。この特別展に際しては、山西らが「大阪湾海岸生物研究会」で蓄積してきた調査データや調査の際に集めた標本類が役立てられた⁵⁵。

1986年8月の友の会合宿（恩原高原）では、参加者全員で一つのことを挑戦してみようという初の試みとしてドングリの仲間3種（カシワ・ミズナラ・コナラ）の分布調査を行った⁵⁶。1987年の合宿（奥伊吹）の思い出として道盛は後年、「当時の参加者記録に「友の会の先生の目に科学者の精神を見た」と記されていますが、これは粉川会長の事だったのではないかと思っています。岩石風呂と銘打った奥伊吹ロッジの浴室でたまたま一緒になった時のことです。真っ裸の会長の岩石説明がひとしきりあり、ひと際大きな岩を覗き込み黒くきらきらした鉱物の結晶がキレイに見えるか尋ねられ、メガネを外した私にはどれがそのものかハッキリせず困りました」と記している⁵⁷。1989年4月には、友の会行事として「親と子の昆虫採集合宿」が行われ「正しい昆虫観察のしかた、採集のしかた、標本の作り方や飼育法を実習する」ことがめざされた⁵⁸。1991年11月に長居公園で行われた友の会「秋のつどい」には、会員とその家族159名が集まった⁵⁹。参加申し込みは251名で、おでん係を引き受けた山西は、「係りを受け続けて以来、家族と博物館の職員に計3回試食してもら

い、ひそかな自信をもって、2日前から準備にとりかかりました」と記している⁶⁰。

1991年度の友の会会員数は1,746名になり、1992年1月に開催された総会では218名の会員が参加した。総会後のバザーの販売は216,436円にのぼり、この収益は友の会運営の費用に充てられた⁶¹。1992年の合宿の記録には、「夕食には川、海の動物がいろいろ料理されていた。鍋島評議員から、それにまつわる楽しい話が聞けた。・・・テナガエビやバイガイなどの雌雄見分け方と生殖器の位置。説明のために、誰かのおかずが見本に差し出され、電報クイズのように、隣の人に受け売りをする。見本のおかずが差し出した人に戻ってきたときには、もう食べる気にはならない」といったシーンも記されている⁶²。

博物館側は次期館長候補だった日浦を突然失ったことによって、その後長い間混乱の時代を送った⁶³。日浦周辺の友の会メンバーの側は結束を固め、日浦の遺志を継ぐべく活発な活動を続け、友の会の会員数を着実に増やしていった。また、日浦が関与した研究サークルからはすでに自立したナチュラルリストが数多く育っていた。

5. 市民グループの成熟と地域活動への展開

桂は、1990年に鞆幼稚園での講演を引き受けたのをきっかけに、奥野晴三、山本博子、鞆幼稚園の有志と一緒に「鞆公園自然探究グループ」をつくり徹底的な調査を始めた。このグループの調査成果は『Nature Study』に報告され、1993年には『鞆公園の自然』の出版に結実した。「鞆公園自然探究グループ」の性格は「メンバーにプロの研究者は一人もいません。ネーミングに「会」とせず「グループ」としているのは、理由があります。メンバーの構成はサラリーマンや主婦、子供たちで、なかなか決まった日程では動けません。またなによりも個人個人が勉強したいという意志を尊重し、会のための活動はやめようと思ったためです。活動は、10人以上のときもあれば1人のときもあり、日曜・休日を利用して行います」と説明されている⁶⁴。

この本が出版された1993年、桂の呼びかけで、「鞆公園自然探究グループ」と博物館友の会の有志計33名による「鞆公園のセミのぬげから調査」が始められた⁶⁵。この行事は、桂の提案で始められ館の学芸員

表7 「鞆公園セミのぬけがら調べ」参加者データ

年齢	2001年9月2日				2002年9月8日			
	男性	女性	不明	合計	男性	女性	不明	合計
0～4歳	7	1		8	2	1	2	5
5～9歳	22	7	1	30	20	10		30
10～14歳	11	6		17	5	6		11
15～19歳	0	0		0	0	0		0
20歳代	0	2		2	2	0		2
30歳代	6	15		21	2	9		11
40歳代	14	14	1	29	12	11		23
50歳代	5	4		9	3	2		5
60歳代	1	0		1	0	5		5
70歳代	1	1		2	2	0		2
記入なし	1	2		3	0	3		3
合計	68	52	2	122	48	47	2	97
一人での参加	10世帯			10名	14世帯			14名
家族での参加	38世帯			112名	29世帯			83名

注) 参加者データの集計は、初宿成彦学芸員にお願いした。参加者最高年齢は2001年76歳女性、最小年齢0歳男の子、2002年は最高73歳男性、最小1歳(性別不明)であった。

を巻き込んでいくという、友の会主導型の行事になった。1995年には、セミが大発生して、集めた脱け殻の総数が45,290個、その大発生の原因は周期なのか、気温なのか、台風の影響なのかと緒説が出、次の大発生の周期まで頑張って原因を究明したいというのが、この調査の原動力になっている⁶⁶。2001年及び2002年のこの調査への参加者の年齢と参加形態は表7の通りである。この集計からは、30・40歳代の親に連れられた5歳～中学生までの層の参加が多いこと、また0～14歳までの参加者の中での男女比は男40：女14(2001年)、男27：女17(2002年)であり、男の子の参加が多いことがわかる。また、都市部の平坦な公園での行事であるため、0歳から70歳台まで参加可能で異年齢間の交流・協力の可能な行事であること、また家族単位での参加が多いことが分かる。

また、個人の発展の一例として田代貢評議員と博物館との関わりを紹介したい⁶⁷。1970年3月に東京水産大学を卒業した田代は、学生時代は大学紛争の影響でほとんど勉強できなかったという。卒業後岩手県内の水産高校に4年勤務したあと、1974年に大阪で府立高校の生物教師として再スタートした。高校生時代、生物部に所属し、昆虫や海洋生物が好きだった田代は、生物教師として植物を勉強する必要に迫られたが、個人ではその糸口がつかめなかった。田代にとって、長居にオープンした自然史博物館は、行けばいつでも相手にしてくれる、開かれた大学であった。植物園案内は瀬戸学芸員を中心に行われて

いたが、田代の目から見た瀬戸は職人気質で権威を否定し、これから研究する人たちの基礎資料を作り学問を支えるという姿勢を持ち続けた人だった。田代は岡本学芸員が始めた「植物スケッチクラブ」にも参加、観察することで植物の形態を知ろう、という岡本の呼びかけに触発され、スケッチすることで疑問点を持つという、自然観察の際の大切な点を学んだという。田代は1975年から野外観察ノートをつけはじめた。最初はただメモのつもりで教えてもらったことを書くに過ぎなかったが、やがて調べるための、じっくり見て植物を理解するためのノートに変わっていった。田代は1978年の大阪府高等学校生物教育研究会第6回会員研究発表で「植物の形態の観察について」という発表を行い、じっくり生物を見ることから学ぶ授業実践を、スギナを素材に報告した⁶⁸。

1980年に岡本と田代は、イヌビワコバチの共同研究を行っていたが、岡本の国内出張中に田代がイヌビワコバチの花粉媒介のしくみを詳しい観察により明らかにした。この成果は二人の共著で館の研究報告に“Mechanism of pollen transfer and pollination in *Ficus erecta* by *Blastophaga nipponica*”として掲載され(1981年3月)、田代は『Nature Study』にも「イヌビワコバチの花粉運搬のしくみ」を執筆した。また同年8月には2人で研究報告に「イヌビワの果囊発生の季節的消長(予察的考察)」を発表した⁶⁹。

田代に言わせると、岡本はユニークで「見て発見

する楽しさ」にヒントを与えてくれる人であり、瀬戸は博学で一般論を説明してくれる人だった。田代は大阪府高等学校生物教育研究会での発表を続けるとともに、職場では必須クラブで「自然観察クラブ」を担当、また教育困難校が生まれ出した時代には、「クズのバスケット編み」や「花と実キュービックパズル」などの工夫を行うなど、さまざまな生物アイデア授業や教材の開発を行った⁷⁰。

奈良市在住の田代は、長居の博物館だけでなく、定年退職後も地元でボランティア活動が続けたいと考え、1995年に勸日本自然保護協会（NACS-J）の自然観察指導員講習を受け、1998年からは奈良で活動を始めた。田代の野外観察ノートは、木本・草本各科の特徴をまとめたものから、1990年代にはフィールドノートを用いた図鑑風のものになり、こうした工夫には『Nature Study』に連載で掲載された「フィールドノートの使い方」のシリーズ⁷¹が役立った。こうした観察記録や博物館で教えてもらっていることをベースに、田代はNACS-Jの観察会用に「ドングリの見分け方」などのプリント類を作成している。

関西トンボ談話会の井上清は現在、国際財団国際トンボ学会の会長を務めており、また谷幸三はトビケラ研究の第一人者になっている⁷²。博物館事務職員時代から日浦とサークル中心の調査研究活動をともにした加納康嗣は、現在は日本直翅類学会の事務局を務める傍ら、地元三重県で「伊賀自然の会」を結成し、観察会中心の活動も行っている⁷³。

また、岡本のもう一人の共同研究者であった北島（旧姓楨山）浅子は、戦時代に瀬戸に勧められてタネを集めて播き膨大な量の標本資料を残した。1979年の第6回特別展「たねと実の世界」では楨山から90種の標本が出品された。楨山は、この特別展に展示されていた「糞の中のタネ」に興味を覚え、自分でもやってみようと糞を洗ってタネの種類の記録を始めた。1985～86年にかけて北島は長居公園内の定点で岡本のアドバイスを受けながら、鳥の糞をしらみ潰しに拾い集めた。また1987～88年にかけては、岡本のアイデアで木の実の成熟パターンと木の実が鳥に食べられて減っていくパターンの調査を、1988～89年にはヒヨドリの水場での糞の調査を行った。岡本と北島は、これらの調査を基に、館の研究報告に2本の論文をまとめた⁷⁴。田代によると、北島は普

通のおばあさんであり、論文を書くことなどにはおじけづき引いてしまうタイプであったが、岡本は北島の記録を学問的に大切なものだと勇気づけたと言う。那須館長も、まじめに普及活動をすれば、先を知りたいという市民とサークルを生み出し育てることが出来る、市民の観察眼や発想を引き出し舞台を上げることで学問仲間を作ることが出来る、と語る⁷⁵。

一方、市民の側からの博物館に対する批判も存在する。博物館を利用した本当の活動は午後5時以降にしかできないのに、現在は人の寄り付かない博物館になってしまっている、という谷の指摘である⁷⁶。勤労者であるアマチュアたちの研究活動を支えるためには、単なる館員の意識の問題だけではなく、十分な学芸員数の確保や研究支援体制の充実など設置者側の一層の努力が必要であろう。

6. 博物館と友の会の新展開

1994年の博物館行事「海辺の自然」では、多数の予想参加者に対し館の限られたスタッフではきまこまかな解説ができないため、補助スタッフを募集した⁷⁷。この時期は行政側から博物館ボランティアの導入が求められた時期であり⁷⁸、1995年度からは、友の会は大阪市のボランティア養成事業を受託して、「補助スタッフ制」を本格的に導入することになった。『Nature Study』誌上では「スタッフのみなさんには行事実施の前に研修を受けていただきますが、博物館としては、同時にこれを少人数でのハイレベルの学習の場と考え、準備します。このような研修を積んだ方々が、地域やさまざまな団体での自然観察の指導者として活躍されるようになれば、自然教育の輪を広げることもつながります」と説明された。募集対象は友の会会員とされ、交通費・昼食代は実費弁償（定額）、謝礼なし、野外での行事はボランティア保険に加入する、というものであった⁷⁹。

1995年度からは鳥の野外観察会にも補助スタッフが導入され、この補助スタッフメンバーの中から、もっと鳥の勉強をしたいという声があがったため、和田岳学芸員が中心になって1996年度には「鳥の勉強会」が、さらに、門戸を広げるべく1997年度にはサークルとして「大阪鳥類研究グループ」が誕生した⁸⁰。

1995年9月、友の会会員の竹田吉郎が見慣れない

ヒメグモを採集、博物館に届けた。その後の採集個体から、友の会副会長西川喜朗（日本蜘蛛学会会長）が、日本では生息が確認されていなかった死亡例の多い有毒のセアカゲグモと同定、友の会有志らと調査を進め、高石市高砂町・千代田町で多数の個体を発見した⁸¹。1996年2月号で『Nature Study』は500号を迎え、特集記事が組まれた。堀田満は「毒グモ騒ぎは、鹿児島でも大々的に報道されました。・・・この騒ぎは大阪の自然についてなにか問題があれば博物館に持ち込めば問題点が判る（解決はしないとしても）し、博物館がそのような役割を果たしていけるのは、その周辺に専門家や友の会を組織し、その中軸として博物館が機能しているからだということを示す良い例でした」と記している⁸²。

会員からの「私にとってのNature Study」の特集の中では、子ども時代からの参加を振り返って八木剛が「Nature Studyは、長い間私にとって唯一最高の発表の場でした。日浦先生が私の質問を記事に下さったことに味をしめ、中学生から高校生にかけての頃、私は自分の「発見」をしばしばNature Studyに投稿しました。自分が書いたものが活字になるということは、なんともいえず心地のよいもので、自分がとても偉くなったような気になるものです。この「心地よさ」は、昆虫少年である私にとっては、たいへん重要なよりどころでした。当時も今も昆虫採集に対する風当たりは強いものがあり、学校教育も含めた日常生活の中で、昆虫少年は常に侮蔑や罵倒の恐怖にさらされています」と綴った⁸³。

1996年に着任した佐久間大輔学芸員は、大学院時代にLANの管理者をやっていた経験を生かし、モデムとノートパソコンを館に持ち込み、館内でインターネット導入の機運を高めた。1997年5月LAN工事及びWeb serverの設置が完了、6月に省際研究情報ネットワークへ接続され、7月10日から館のHPが一般公開された⁸⁴。

1998年12月には、博物館主催のメーリングリスト【omnh】が立ち上げられた。【omnh】が扱う話題は、自然史（生物や地学関係）に関する事、大阪市立自然史博物館や友の会の行事に関する事、他の自然史系博物館や博物館施設一般に関する事、学芸員に関する事であり、友の会会員でなくても誰でも自由に参加できる⁸⁵。【omnh】は、最初の1年に

3,181通（1日平均8.7通）、2年目2,701通（同7.4通）、3年目2,294通（同6.3通）、4年目（2001年12月6日～2002年12月5日）2,091通（同5.7通）のトラフィック量があった。参加者数は、立ち上げ時点で65名、以後毎年12月5日時点で、1999年169名、2000年243名、2001年290名、2002年315名である。友の会会員（ML登録時点）は1999年60.8%、2000年48.6%であった⁸⁶。この博物館主催MLの開設によって、従来の友の会会員にとどまらない層の利用者ネットワークの構築と維持がなされつつある。ただし、学芸員の発言数が全トラフィックの29.4%（1年目）、26.6%（2年目）、24.5%（3年目）を占め、和田は学芸員による話題提供あるいは方向付けの減少が、全体のトラフィックの減少につながっているのかもしれない、と自身のHPにまとめている⁸⁷。

1998年度には、「友の会経営問題検討委員会」が2回開かれ、友の会の運営面・財政面の話し合いが持たれた⁸⁸。友の会の財政上の課題の一つは、友の会事務員の人件費問題であった。友の会事務員に関しては、これまでのアルバイト待遇を改善するために、1994年4月1日に、大阪市教育振興公社の嘱託職員として処遇することとなり、常勤化及び処遇の抜本的改善が図られた。その反面、振興公社に支払う事務費が嵩み、1990年代後半の友の会の経営難が生じたのであった⁸⁹。1999年にも引き続き友の会経営問題検討委員会が2回開かれ、2000年度から友の会会計を二部制度に改める方針を決め、友の会の特定非営利活動法人格取得についての検討を行うことになった⁹⁰。友の会財団化のアイデアは、すでに1980年代末に、道盛が思いつき、個人的な打診を行っていた。道盛が財団化を提案したきっかけは、館学芸員や友の会評議員の、定年退職後の勤め先づくりであった。しかしバブル崩壊後は、財団の基本財産を作ることも困難である等の事情で、友の会財団化は実現には至らなかった⁹¹。ところが、1995年度からの大阪市のボランティア養成事業の受託や1998年3月の特定非営利活動促進法の制定をきっかけとして、館内で友の会NPO法人化を検討する機運が高まった⁹²。

2001年4月27日、「花と緑と自然の情報センター」が開館し、情報センター側に、自然史関係のグッズや本、自然観察用具を販売する「ミュージアムサー

ビス」がオープンした⁹³。また2001年には、友の会をその事業組織とする包括的な法人「大阪自然史センター」を設立する準備が進められた⁹⁴。「特定非営利活動法人大阪自然史センター」は、①友の会、②ミュージアムショップ、③出版、④ボランティア養成事業などを行う組織とされ、従来の友の会を、NPO法人大阪自然史センターの中心的な事業組織と位置付ける方向が定まった。2001年9月14日、NPO法人の申請がなされていた大阪自然史センターに対して、大阪府知事からの認証がなされ、2002年1月27日の友の会総会で、友の会の規約が改正された⁹⁵。2001年10月25日には、27年間友の会の会長を務めた粉川が逝去し、2002年度からは西川が友の会会長として選出されている。

2002年度のNPO法人大阪自然史センターの事業は、①友の会事業（会員1900世帯に月刊誌Nature Studyを配布、月例ハイキングなど各種事業を展開）②ボランティア事業（博物館の観察会に補助スタッフを派遣、研修や当日の交通費を支給）③ミュージアムサービス事業（博物館で自然書や観察用具・グッズを販売）④デジタルミュージアム事業（博物館の収蔵品データベース作成を受託）⑤教育活用ネットワーク事業（文部科学省委託事業、学校園との連携促進）とされている⁹⁶。デジタルミュージアム事業は国の雇用創出事業をNPOが受け皿となって受託したものであり、②④⑤を見る限り、今のところNPO法人大阪自然史センターは博物館の下請け的な働きをしていると言えよう。このNPO法人は、友の会人件費問題の友の会会計からの分離と委託事業の受託が立ち上げの大きな契機となっている。

NPOの立ち上げに際し、友の会評議員の多くは「よく分からない」と語り、また一般会員から取り立てて反対意見が上がることもなかった⁹⁷。学芸員主導で友の会活動やNPOの運営が進んでいる（友の会の空洞化現象）中で、1980年前後の日浦時代を経験した熟年会員層の後を継ぐ、友の会活動の次世代の担い手を生み出すことは、現時点では多くの困難を抱えていると言えよう。1998年11月の「友の会秋のつどい」は泉佐野漁港で「大阪湾まるごとトトレレ底引き網」を行った。このつどいは、食用の魚介類だけでなく、本来の漁では捨ててくるような“ゴミ”の中の生物を観察し、グルメパーティーをするとい

う試みであり、申し込み者450名、実際の参加者は135家族365名となった⁹⁸。このようなお膳立てされた行事への参加者数は多く、友の会全体としては受益者団体化が進行するという事態が生じている。

7. まとめと考察

長居公園への移転にともない、「大阪市立自然史博物館友の会」と名称を変更した会員組織は「これから勉強をしようとする人達の会」と位置付けられ、同好会的・研究的側面は、サークル活動で深めていこうという方針が学芸員側で確認された。友の会の会誌『Nature Study』の編集作業は朝時代に引き続き、学芸員の手によって行われ、単著記事の48.3%が学芸員によって書かれるなど、学芸員側の努力の結果維持されている側面が強い。一方、『Nature Study』は友の会の会費収入によって発行されており、館の広報誌・対外的交換誌の役割も果たしているため、博物館と友の会との関係は、「もたれ合い」とも「共生関係」とも表現しうるものである。

1970年代後半、日浦は研究サークルの育成を後輩学芸員たちに勧め、自らも率先してサークルづくりに励んだ。長居移転以前に結成されていた関西トンボ談話会や近畿オサムシ研究グループ、1978年に結成された直翅類研究グループは、館の収蔵資料目録をまとめ、博物館の資料収集に貢献した。他の学芸員たちも1970年代後半に各自の個性に応じた様々な形態の研究サークルを立ち上げ、これらの研究サークルから友の会評議員層をはじめとする多くのナチュラルリストが生まれ育っていった。日浦自身は、アマチュアたちを自立した研究者として育て、館の資料整理を手伝ってもらうことを射程に入れていた。これらの研究サークルや、学芸員や研究室が事務局機能を担っている研究団体、また大阪周辺自然史関係団体にとって、館の集會室・会議室・実習室が無料の学習の場として有効に機能してきた。公民館のない大阪市において、市民の学習スペースとして博物館が果たしてきた役割は大きい。

1970年代末から1990年代初頭は、評議員層の積極的な関わりによって、友の会活動が活発に行なわれ、会員数が増加していった時期であった。「友の会カブトエビ調査団」の成果は特別展にも展示された。1983年の日浦の急逝は、博物館と日浦周辺のアマチュア

たちに大きな衝撃を与えたが、アマチュアたちはさらに結束を固め、友の会活動を盛り上げた。月例ハイキングの実施や、友の会グッズの作成販売、「秋のつどい」などの様々な試みは、着実に友の会会員数を増やしていった。

学芸員との共同研究やサークルの共同運営の経験を蓄積した後、自立した組織として調査を続け、友の会活動の一部をも主導するグループの活動や、個人の長年にわたる学びの蓄積と、学校教育や地域活動への発展例も存在している。

その一方、友の会全体としての活動は評議員層の中高年化と職場での多忙化、若手評議員層の学芸員としての就職⁹⁹等を原因として、活性化が難しい状況に置かれている。博物館活動への市民参加を進める方策として、ボランティア養成事業を友の会が受託して、教育普及事業の一環として館主催行事の補助スタッフに一般会員を採用したり、友の会行事の際のボランティアスタッフを募集することで、従来の評議員層にとどまらない一般会員のアイデアを行事に反映したり、役割を分担することが目指されているが、活性化には至っていない。また、博物館主催MLの開設による従来の友の会会員にとどまらない層の利用者ネットワークの構築と維持、友の会の人件費問題の分離や委託事業の受託を契機としたNPO法人大阪自然史センターの立ち上げも、学芸員主導の状況下、学芸員側の努力によって行われており、次世代の活動の担い手を層として生み出すには至っていない。

自然史系博物館関連の特定非営利活動法人は、現在のところ、この「NPO法人大阪自然史センター」の他に、兵庫県立人と自然の博物館のボランティア養成講座修了生のみを会員とする「NPO法人人と自然の会」¹⁰⁰、福井県立恐竜博物館と連携し、学校関係者や関連企業から個人として理事を選出して普及啓発事業やミュージアムショップの運営等を行う「特定非営利活動法人福井恐竜博物館後援会」¹⁰¹が存在する。これら3つの博物館に関係の深いNPO法人の設立の経緯・形態を見る限り、NPO法人をもって「市民参加」と直截に結びつけて考えるべきではないと考えられる。なぜなら、これら三つのNPO法人は、博物館側の論理を中心として生み出された組織だと思われるからである。詳細な比較は、稿を改め

て論じたい。

博物館をめぐる状況は近年大きく変化しており、設置者である大阪市は博物館を集客施設とみなし、入館者数の多寡に大きな関心を寄せている¹⁰²。また大阪市は、2000年度から事業評価システムの導入を行っており、この事業評価システムは、事業担当課が行う自己評価を基本としている¹⁰³。

2002年度の「業績評価調査書」（担当は教育委員会事務局自然史博物館課）では、事業名に「自然史博物館収蔵品の充実」を掲げ、今後の方向性（対応策）としては、「本館部分の常設展示の全面更新」を上げている¹⁰⁴。大阪市立自然史博物館本館の常設展示は、1986年にリニューアルが行なわれたのを最後に今日まで、展示更新の予算要求が通らないままに置かれている。このため、展示の内容が、現在の学問水準を反映していない等の不都合が生じている¹⁰⁵。

またこの2002年度「業績評価調査書」では、「サービス成果指標」として入館者数及び友の会会員数を上げている。また、「市民参画・協働の現状」という項目の「今後の可能性」には、「特定非営利活動法人『大阪自然史センター』の設立により、当館が実施してきたさまざまな事業の企画・実施を市民参画のもとに進めていく」と記されている。ただし、この項目の説明の中で、入館者アンケートの実施や行事補助ボランティア制度の導入は、博物館活動への市民参加の一形態と言えようが、「デジタルミュージアム事業を特定非営利活動法人大阪自然史センターに委託」していることが、「市民参画・協働」と表記されるのは問題があろう。市役所内部でのアピールのためだけに、博物館の自己評価が存在するわけではないからである。

長居移転以降、大阪市立自然史博物館における市民参加は、友の会活動とサークル活動に集約されており、そこから派生する特別展への協力や調査研究活動、標本類の寄贈や収蔵目録作りにほぼ限定されてきた。NPO法人大阪自然史センターの発足により、今後は友の会や研究サークルの枠を超えて、「業績評価調査書」の言葉を借りれば、「館が実施してきたさまざまな事業」の中で、市民がどこまで・どのような形で関与していくのか、またその人材をどのような形で育成・発掘していくのかが注目される。

これまでに述べてきた友の会及び研究サークルの

実態が示す通り、活動の担い手となる市民を育てるには、学ぶ楽しさと学問的な成長を学芸員と市民が共有する必要がある。過労のために志半ばで倒れた日浦の教訓を生かす意味でも、社会教育機関であり研究機関でもある博物館に、設置者側は表層的な集客効果を求めるべきではなく、過去から将来に亘る長期的な視野と見識を持って、条件整備に努めなければならないのである。

8. 伊藤理論との接点と今後の課題

最後に、伊藤寿朗の「第三世代の博物館」論の具体的検証、及び大阪市立自然史博物館と「地域博物館論」との接点について述べておきたい。伊藤は、「第三世代の博物館」論では、「市民参加の地域共同調査・共同研究」というおおまかな表現を用いており、その調査・研究の質や量にまでは踏み込まなかった。大阪市立自然史博物館の場合、博物館の利用者である市民を楽しませるだけではだめで、学芸員に近いところまで市民を育て上げる、そのレベルは高ければ高いほどよく、目標を高く持つべきだと考えられている¹⁰⁶。実際に、日浦と近畿オサムシ研究グループの協同研究や、岡本と田代の協同研究をはじめとして、学芸員と市民による学術研究の成果が数多く蓄積されている。伊藤が、「第三世代の博物館」論の中で市民との協同調査・協同研究の項目でモデルとして上げた東京都高尾自然科学博物館、横須賀市自然・人文博物館、川崎市青少年科学館との量的・質的比較という課題がまず考えられる。

特に、調査・研究の質は重要な検討すべき課題である。館の定期刊行物である『大阪市立自然史博物館研究報告』と不定期刊行物である『自然史研究』の両誌は掲載論文に業績番号が付され、自然史科学研究の第一線が目指されている。これに対し、伊藤の「地域博物館論」の完成に大きな影響を与えた平塚市博物館では、研究報告『自然と文化』が発行されているが、掲載論文は必ずしも学術レベルを意識しているわけではない。

伊藤は、「地域博物館論」の構想にあたって、最初、日浦の「人間と科学と教育の関係について」(1972)を参照した。日浦は、地方博物館が突破口を切り開くためには、大博物館の縮刷版を目ざすのではなく、まったく別のアイデアをもつべきことを提

唱した。日浦の描く「別の看板」「地方主義の徹底」は、例えば大阪層群や大阪の照葉樹林に関する研究・資料・展示の徹底であり、「そうすれば大阪の博物館の資料や展示や研究は、ローカルであり特殊であっても、その狭い分野に関する限り一流であり、世界一であり、他のどの博物館にもないオリジナルなものになり得る」と主張されている¹⁰⁷。また、日浦のこの主張の原型は、さらに1965年の千地「新しい地方博物館—とくに自然科学博物館の場合—」にまで遡ることが可能である。千地は、「調査・研究を基礎として地域の自然・身のまわりの自然から出発することが、新しい自然史博物館の原則である」とし、「その活動の積み重ねによって集められ、保管されているコレクションは分類学上、あるいは地方生物誌・地方地質誌などの学術研究上価値のあるものとなり、地方博物館が単に社会教育機関として発展するだけでなく、研究機関あるいは学術研究上なくてはならぬ施設として、その地位を固めることになる」と主張している¹⁰⁸。つまり、大阪市立自然史博物館は、市民を巻き込みながらも、学術研究機関としての位置付けを追及し続けた博物館であった。伊藤は「日本博物館発達史」(1978)の中で大阪市立自然史博物館に言及し、「主張を持つ博物館」「地域博物館」の言葉を用いた。この二つの言葉の内容は「多少のズレはあるにしても内容は本質的に同じことであり、近代博物館から現代博物館への転換を主体的に表現した概念でもある」と記している¹⁰⁹。

1976年に開館した平塚市博物館は、その出発に際し、「地域博物館」の構想を掲げた。『平塚市博物館年報』1(1977)には、「専門家ではない一般市民にとっては、一つの事柄を学問分野にとらわれないいろいろな見方から知ることのできるような博物館こそ必要ではないかと考えた」「平塚市博物館は、観光地や大都会に立地した博物館ではないので、地域の市民に何度も足を運んでもらうような密接なつながりが、絶対条件として要求される」と記されている¹¹⁰。さらに、平塚市博物館学芸員の小島弘義・浜口哲一は、地域博物館にとって不可欠の要素として、地理的条件と地域住民の学習権の保障、館側の理念と体制を上げ、立地条件に絡めて、「交通の便と市街地的条件を考えて設立しないと、地域住民の日常の利用からかけ離れた、観光地的利用に終わり、どん

なよい理念があっても館活動を始動しづらくなる」と記した¹¹¹。また小島・浜口は、日浦の「研究と展示」(1968)に示された「地方主義」にヒントを得て「当館では、地域博物館の任務は、地域の自然と文化を再発見し、地域住民とともに再評価するところにあると考え、学芸員の研究もその中心を地域的研究においてきた」と記し、「地域的研究は、その過程で多くの地域住民の協力のもとに進められる」と主張した¹¹²。

こうした、小島・浜口らの主張に触発されながら、伊藤は「地域博物館論」を構築してゆく。伊藤は、「博物館と地域—地域博物館観の成立をめぐる—」(1979)の中で、従来の博物館のあり方に対して、地域博物館は次の2点を主張するとした。①中央型博物館が属性とする普遍的科学法則の地域への適用ではなく、逆に地域課題を軸とすることによって領域の総合化(とりわけ自然科学と人文科学の地域課題に即した総合化)による新しい価値の発見を課題とする。②地域住民を利用者として客体化するのではなく、地域住民一人一人がもっている豊かな能力と発達の可能性を博物館の中に引き出し、ともに働くことでいくことを課題とする¹¹³。

その後、伊藤の「地域博物館論」の中には、地域志向型・中央志向型・観光志向型、という3類型が登場する(1986)¹¹⁴。そして伊藤は、『ひらけ、博物館』(1991)の中では、地域博物館の旗手として平塚市博物館を取り上げ、「特定の地域を対象としても、人文、自然科学の領域が孤立し、特定の領域に限られてしまっている館は限界を持っている」と指摘する。さらに伊藤は、「博物館と市民グループの共同研究は、調査報告書として数多く刊行されており、各館の紀要や研究報告書には、市民による地域の研究が報告されている。閉鎖的なマニアとは異なる、広がりや深まりを持った市民研究者の登場であり、既成の学問のありかたへの挑戦も始まっている」と、記している。そしてその直後に、伊藤は、大阪市立自然史博物館・横須賀市自然博物館・東京都高尾自然科学博物館を併記しているのである¹¹⁵。

しかし、大阪市立自然史博物館に限って見ても、自然科学に専門特化した博物館であり、また学芸員も含め、館に集う多くの市民は世間一般の基準から見ればマニアと呼べる人が多く、またマニアを閉

鎖的と切って捨てるのも根拠に乏しい。伊藤の類型化の発想¹¹⁶はある種の単純さを備えており、分かりやすいがために、多くのファンを生み出してきたと言える。ただ、その類型化は、総じて根拠に乏しいのではないだろうか。例えば、下記の市民の展示見学の種類分類は、その最たるものであろう。

第一は、技術者(職人)や小学生グループで、資料そのものをていねいに観察している。資料の形や色の違いも含めて、さまざまな発見をし、またそれだけに疑問も数多く生まれてくる。

第二は、学校の先生が典型で、一般に高等教育を受けてきた人に多いが、資料ではなく、解説文を中心にしている。野外の観察会でも、説明はよく聞くが物は見ていない。自分で確かめる前に、回答を求め満足している。したがって、解説が不十分だという指摘は多いが、そのための選択肢が用意できれば済んでしまう¹¹⁷。

ここでは、あまりに素朴な社会的属性を根拠にした、人間賛美と人間批判が行なわれていないだろうか。

さて、伊藤の「地域博物館の思考」(1990)の中では、大阪市立自然史博物館への言及は一切見当たらない¹¹⁸。伊藤は、自然科学の学術的研究活動が続ける大阪市立自然史博物館の現実のありようと、平塚市博物館の中に見出した活動内容を、一つの概念で括ることに困難を感じ出していたのではないだろうか。

伊藤は、日浦の論文や大阪市立自然史博物館が生み出した市民との共同研究・共同調査の成果をアイデアの源の一つとして「第三世代の博物館」論及び「地域博物館論」を組み立てていった。伊藤はやがて、平塚市博物館の理念や活動により魅力を感じるようになり、以後、伊藤と大阪市立自然史博物館との接点は深まることはなかった。伊藤の理論モデルとは無関係に、大阪市立自然史博物館の市民参加の歴史はその後も進行しており、伊藤の類型化には収まりきらない、友の会活動から学術研究までの幅広い実践とその成果が蓄積され、更新され、時には停滞してきた。また一方で、伊藤の「地域博物館論」の主張は、エコミュージアム論で議論される博物館

資料や調査研究活動の問い直しの主張と比較照合して論じられるべき価値を含んでいると思われる。

伊藤は、「第三世代の博物館」論及び「地域博物館論」を通じて、1970年代後半から1980年代末までの市民参加型と目される博物館活動をリストアップした。伊藤の類型化から一旦自由になり、これらの博物館活動の実際を実証的に跡付け比較する作業が、博物館における市民参加の問題を検討するために必要とされているのである。

本研究は、追手門学院大学「特色ある個人研究費」(2001年度)の一部、及び日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C2)(2002～2003年度)「研究課題:博物館における市民参加に関する歴史的研究」の一部を用いてなされたものであることを付記しておく。

【謝辞】

本稿の作成に当たっては、大阪市立自然史博物館の那須孝悌館長はじめ、元館長、新旧学芸員の皆さん、友の会の皆さん他、多くの方々にお世話になった。聞き取り調査に応じてくださったのは那須館長をはじめとする以下の方々である。大阪市立自然史博物館元館長の千地万造氏、宮武頼夫氏、元学芸員の瀬戸剛氏、布村昇氏、布谷知夫氏、現学芸員の岡本素治氏、山西良平氏、和田岳氏、松本吏樹郎氏、友の会会長の西川喜朗氏、友の会元評議員の山本博子氏、谷幸三氏、八木剛氏、現評議員の桂孝次郎氏、道盛正樹氏、田代貢氏、白木江都子氏、梅原徹氏、六車恭子氏、NPO法人大阪自然史センター理事の加納康嗣氏、東京都高尾自然科学博物館の森岡ますみ館長、横須賀市自然・人文博物館学芸員の山本健一郎氏、NPO法人人と自然の会理事の清水文美氏、福井県立恐竜博物館企画主査小島敏弘氏。また、大阪市立自然史博物館学芸員の樽野博幸氏、川端清司氏、初宿成彦氏、佐久間大輔氏からも、貴重なお話や資料を提供していただいた。オサムシ研究の動向については、石田惣氏、八尋克郎氏からアドバイスをいただいた。心からお礼申し上げます。

【註】

典拠中、『Nature Study』誌についてはN. S.・『大阪市立自然史博物館館報』は館報・『大阪市立自然史博物館研究報告』は研究報告と略記する。

- 1 拙稿「大阪市立自然史博物館における市民参加の歴史的検討(1)—大阪市立自然科学博物館時代—」『博物館学雑誌』27-2、2002年、1-17頁。
- 2 伊藤寿朗「地域博物館論—現代博物館の課題と展望」長浜功編『現代社会教育の課題と展望』1986年、233-296頁。伊藤『ひらけ、博物館』岩波ブックレットNo. 188、1991年。伊藤『市民の中の博物館』吉川弘文館、1993年。
- 3 伊藤、前掲「地域博物館論—現代博物館の課題と展望」261頁。
- 4 森岡ますみ東京都高尾自然科学博物館館長からの聞き取りによる。2002年11月現在、都と八王子市の間で移管が協議されている。
- 5 拙稿「博物館と市民の理解に向けて」財団法人かながわ学術研究交流財団(K-FACE)『三浦半島エコミュージアムかわら版』第2号、2003年、2頁、及び、山本健一郎横須賀市自然・人文博物館学芸員からの聞き取り調査による。
- 6 「Ⅷ 大阪市立自然史博物館友の会」館報9、1980年、25頁。
- 7 「研究会総会の様子」N. S. 20-9、1974年、8頁。「新会長に粉川昭平氏」「空席の副会長1名が決まる」N. S. 20-10、1974年、10-11頁。「友の会のおしらせ」N. S. 21-7、1975年、6頁。布谷知夫「昭和50年度友の会総会のようす」N. S. 22-5、1976年、14頁。
- 8 「Ⅶ 大阪市立自然史博物館友の会」館報7、1977年、29頁。
- 9 同上、29-30頁。「Ⅷ 大阪市立自然史博物館友の会 会員」館報8、1978年、25頁。「Ⅷ 大阪市立自然史博物館友の会 会員」館報9、1980年、25-26頁。
- 10 「Ⅱ 大阪市立自然史博物館友の会 Nature Study (月間普及誌)」館報11、1983年、26頁。
- 11 那須孝悌「平成10年度東海地区博物館連絡協議会・講演 博物館活動における市民参加」平成9年度愛知県博物館協会歴史民俗部門研修担当館 一宮博物館 名古屋市博物館『平成9年度

- 愛知県博物館協会歴史民俗部門研修会の記録 活きている博物館～歴史系博物館のこれから～」愛知県博物館協会、2000年、104-113頁、及び和田岳学芸員からの聞き取りによる。
- 12 布谷「教育普及活動のポイント《普及活動の設備》」日本博物館協会『博物館研究』10-2&3、1975年、70-71頁。「IV 施設」館報7、1977年、34頁。
- 13 那須館長からの聞き取りによる。
- 14 布谷元学芸員からの聞き取りによる。
- 15 徳島昆虫団体研究会『昆虫科学』1、1955年、21頁、及び宮武頼夫「サークル活動と博物館—大阪市立自然史博物館の歩みから—」『東北の自然』1、1985年、4-5頁。日浦『蝶のきた道』蒼樹書房、1978年、11頁。なお、谷幸三氏によれば、徳島昆虫団体研究会は溝口が作ったものであるという。
- 16 「V 学会・研究会・サークル活動の育成」館報6、1977年、14-15頁、及び谷もと友の会評議員からの聞き取りによる。
- 17 日浦「なんせめでたいこっちゃ ぱったりぎす50号!」『ぱったりぎす』50、1983年、1453頁。
- 18 日浦「談話会の羽化期」関西トンボ談話会『gracile』10、1970年、1-2頁。
- 19 日浦「はじめに」『大阪市立自然科学博物館収蔵資料目録第6集 近畿地方のトンボ第1部』1974年、1-2頁、及び『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第7～9集（1975、1976、1977年）による。
- 20 日浦「分化年代推定のころもみ」『昆虫分類学若手懇談会ニュース』11、1975年6月、2-3頁。
- 21 谷氏からの聞き取りによる。
- 22 「V 学会・研究会・サークル活動の育成」館報6、1977年、14-15頁。
- 23 近畿オサムシ研究グループ『大阪市立自然史博物館収蔵目録第11集 近畿地方のオサムシ』1979年。
- 24 曾田貞滋『オサムシの春夏秋冬 生活史の進化と種多様性』京都大学学術出版会、2000年、60-61頁。
- 25 大阪海洋生物研究グループ「大阪湾岩礁海岸動物相(1)—1974年における海岸のようす—」N. S. 21-3、1975年、5-8頁、及び布村昇もと学芸員からの聞き取りによる。
- 26 大阪府農林部自然保護課『金剛・生駒山地及和泉山脈の環境保全調査（学術調査）』1977年、及び千地万造元館長、布谷元学芸員からの聞き取りによる。
- 27 大阪府農林部自然保護課『北摂山系自然環境保全調査（学術調査）』1978年。
- 28 布谷「大阪の森林をいっしょに調べてみませんか」N. S. 23-3、1977年、8頁。大阪の森林研究グループ「五月山のアラカシ林」N. S. 24-2、1978年、9-11頁、及び布谷もと学芸員からの聞き取りによる。
- 29 那須館長からの聞き取りによる。
- 30 衣笠弘直「日浦勇さんと野尻湖発掘」N. S. 30-1、1984年、8頁。初宿「昆虫の破片から過去をさぐる—日本における第四紀昆虫学の20年—」『昆虫と自然』35(10)、2000年、39-42頁。宮武、前掲「サークル活動と博物館—大阪市立自然史博物館の歩みから—」。
- 31 直翅類研究グループ『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第15集 日本の直翅類』1983年。
- 32 岡本素治「植物スケッチクラブの御案内」N. S. 24-2、1978年、8頁。
- 33 「普及教育事業」館報6、1977年、28頁。また、以下「植物スケッチクラブ」に関する記述は、岡本学芸員及び田代貢友の会評議員からの聞き取り、及び『植物スケッチクラブ通信』全31号による（『植物スケッチクラブ通信』全号は、田代氏蔵）。
- 34 「普及教育事業」館報10、1982年、29頁、及び岡本学芸員からの聞き取りによる。
- 35 山西良平「大阪湾の海岸生物を調べよう—大阪湾海岸生物研究会の御案内—」N. S. 26-3、1980年、7頁。
- 36 日浦「自然史ノート」『博物館研究』15-5、1980年、3-7頁。
- 37 「金剛山の自然観察会が行われました」N. S. 23-10、1977年、11頁。
- 38 桂孝次郎「大阪平野のカブトエビを調べよう!」N. S. 24-6、1978年、2頁。道盛正樹「友の会行事の記録 カブトエビの観察会」N. S. 24-9、

- 1978年、8-11頁。
- 39 桂「河内平野のカブトエビ調査をしませんか！」
N. S. 27-5、1981年、12頁。
- 40 日浦、前掲「自然史ノート」。
- 41 村井貴史「カブトエビ調査に最年少で参加させて頂きました」N. S. 27-8、1981年、2頁。吉村協三「カブトエビ調査に参加して」N. S. 27-9、1981年、8頁。
- 42 友の会カブトエビ調査団「水田の生き物—1981年カブトエビ調査の副産物—」N. S. 31-12、1985年、8頁。同「水田の生きもの—1981年カブトエビ調査の副産物—(2)」N. S. 32-1、10頁。同(3)N. S. 32-9、1986年、9頁。同(4)N. S. 33-4、1987年、9-11頁。
- 43 「友の会行事の記録」N. S. 29-7、1983年、10-11頁。
- 44 「大好評だった タンポポコーヒー！ 友の会の“春のハイキング”」N. S. 30-6、1984年、10-11頁。
- 45 日浦「大阪のアサギマダラを調べてみませんか」N. S. 29-6、1983年、6頁。日浦「アサギマダラの旅行」N. S. 29-6、1983年、7-11頁。
- 46 大阪のアサギマダラを調べる会『I love アサギマダラ情報』1、1983年。同『We Love アサギマダラ情報』7、1983年。宇野広次「祝！We Love！アサギマダラ情報100号」『100号記念だよ！We Love！アサギマダラ情報』100、1990年、34-35頁。大阪のアサギマダラを調べる会（文責：竹本卓哉）「1983～84年アサギマダラ調査報告(1) 旅をするチョウ アサギマダラの謎に挑戦して」N. S. 31-4、1985年、3頁。
- 47 大阪のアサギマダラを調べる会『We Love アサギマダラ情報』8・9、1983年。
- 48 「近畿オサムシ研究グループ」をさす。
- 49 「直翅類研究グループ」をさす。
- 50 「生駒の昆虫を見直す会」をさす。
- 51 編集部「日浦さん急逝される」N. S. 29-11、1983年、11頁。千地万造「日浦勇氏の死を悼む」N. S. 29-12、1983年、2頁。「日浦さんの思い出」N. S. 30-1、8-10頁、1984年。「日浦さんの遺稿出版についてお願い」N. S. 30-1、11頁、1984年。「日浦さんの遺稿出版事業への御支援に対するお礼とおわび」N. S. 31-1、1985年、6頁。宮武「日浦勇著作集再刊のお知らせ」N. S. 31-5、1985年、11頁。「特別陳列「自然観察への招待—ナチュラリスト・日浦さんに学ぶ—」」N. S. 31-4、1985年、2頁。
- 52 大阪のアサギマダラを調べる会・村井「1983年のアサギマダラ調査の成果」N. S. 30-5、1984年、3-5頁。大阪のアサギマダラを調べる会（文責：竹本）、前掲「1983～84年アサギマダラ調査報告(1)」。富永修「1983～84年アサギマダラ調査報告(2) 奈良県と喜山の越冬幼虫調査結果」N. S. 31-4、1985年、4-8頁。
- 53 「60年度友の会総会が開かれました」N. S. 31-3、1985年、4頁。谷氏、梅原徹氏からの聞き取りによる。
- 54 道盛「友の会行事の記録 1985年3月24日 炭焼きの見学」N. S. 31-8、1985年、4頁。布谷「友の会の行事の記録「草木染め」11月11・25日」N. S. 31-2、1985年、9頁。鍋島靖信「友の会行事の記録 底引き網の生物をみる会 1986年6月21日」N. S. 32-10、1986年、114頁。
- 55 山西、パネルディスカッション「博物館のある社会」『文部科学省委嘱事業 講演とフェスティバル 瀬戸内の自然 自然史博物館で学ぶあなたの町の自然』2002年2月24日（講演テープは大阪市立自然史博物館蔵）。
- 56 藤井伸二「恩原合宿におけるカシワ・ミズナラ・コナラの分布調査のまとめ 一友の会合宿の記録(4)—」N. S. 32-12、1986年、4-6頁。
- 57 道盛「粉川会長を偲ぶ」N. S. 47-12、2001年、5頁。
- 58 「友の会の行事のお知らせ」N. S. 35-3、1989年、12頁。
- 59 桂「友の会「秋のつどい」の記録と感想 昆虫さがしゲームの成果」N. S. 38-2、1992年、8頁。
- 60 山西「友の会「秋のつどい」の記録と感想 おでん係から」N. S. 38-2、1992年、8頁。
- 61 「1992年度友の会総会が開催されました」N. S. 38-3、1992年、5頁。
- 62 白木江都子「友の会合宿 記録と感想 評議員より」N. S. 38-8、1992年、9頁。

- 63 那須、前掲11、及び那須館長、瀬戸剛もと学芸員からの聞き取りによる。
- 64 桂孝次郎、奥野晴三、山本博子「鞆公園自然探究グループの活動」『鞆公園の自然—都市の自然への招待—』鞆公園自然探究グループ発行、1993年、4-5頁、121頁。
- 65 大阪市立自然史博物館友の会有志・鞆公園自然探究グループ有志「鞆公園のセミのぬけがら調査」N. S. 40-1、1994年、7-9頁。
- 66 西川喜朗氏、桂氏からの聞き取りによる。
- 67 以下の内容は、田代氏からの聞き取りによる。
- 68 田代「植物の形態の観察について」大阪府高等学校生物教育研究会『生物教育研究会誌』6、1978年、47-51頁。
- 69 田代「イヌビワコバチの花粉運搬のしくみ」N. S. 27-1、1981年、3-7頁。岡本・田代“Mechanism of pollen transfer and pollination in *Ficus erecta* by *Blastophaga nipponica*” 研究報告34、1981年、7-16頁、図版3-4。同「イヌビワの果囊発生の季節的消長（予察的研究）」研究報告35、1981年、43-53頁。岡本学芸員及び田代氏からの聞き取りによる。
- 70 田代「植物の形態の観察の一方法」大阪府高等学校生物教育研究会『新しい生物実験の開発』1982年、73頁。同「自然とのふれあいを授業に生かす工夫」『生物教育研究会誌』23、1994年、60-63頁。
- 71 藤井俊夫「フィールドノートの使い方(1)」N. S. 38-2、1992年、11頁。西川喜朗「フィールドノートの使い方(2)」N. S. 38-10、1992年、4-5頁。
- 72 井上清・谷幸三『トンボのすべて 改訂版』トンボ出版、2002年（初版1999年）、及び田代氏からの聞き取りによる。
- 73 加納康嗣氏からの聞き取りによる。
- 74 岡本素治・北島浅子「液果樹種における果実の成長と鳥による消費の過程の観察（予報）」研究報告42、1988年、1-13頁。同「多肉果の果実提供パターンと種子散布 都市緑地植物園における観察」研究報告46、1992年、25-44頁。岡本「町の自然 ヒヨドリと木の実」（助）日本鳥類保護連盟『私たちの自然』374、1993年、6-11頁、及び岡本学芸員からの聞き取りによる。
- 75 田代氏、及び那須館長からの聞き取りによる。
- 76 谷氏からの聞き取りによる。
- 77 「やさしい自然観察会「海べのしぜん」補助スタッフ募集」N. S. 40-4、1994年、12頁。
- 78 那須、前掲11。
- 79 「博物館行事の補助スタッフを募集します」N. S. 41-3、1995年、9頁。
- 80 大阪鳥類研究グループ「沿革」<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/wada/OBSG/OBSG.html#Anchor202313>
- 81 西川「毒グモに注意！セアカゴケグモが大阪に上陸」N. S. 41-12、1995年、11頁。
- 82 堀田満「特集① おめでとう500号 南の国から」N. S. 42-1、1996年、3頁。
- 83 八木剛「特集④ 「私にとってのNature Study」」N. S. 42-1、1996年、15頁。
- 84 佐久間大輔「博物館でサーバーを立ち上げる人のための手記 大阪市立自然史博物館サーバー開設にいたるドキュメント—今後導入される方のために」<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/sakuma/history-omnh.html>
- 85 「大阪市立自然史博物館メーリングリスト参加者募集！」N. S. 44-11、1998年、9頁。佐久間[omnh: 1]。
- 86 茂似太（リストオーナー）[omnh: 3184][omnh: 5884][omnh:10280]。
- 87 和田岳「近頃の自然史博物館 2001/1/11」<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/wada/recent-mus10.html>
- 88 「1999年度自然史博物館友の会総会の記録」N. S. 45-3、1999年、8頁。
- 89 「普及教育事業」館報19、1994年、18頁。「普及教育事業」館報20、1995年、28頁。西川氏及び和田学芸員からの聞き取りによる。
- 90 「2000年度自然史博物館友の会総会の報告」N. S. 46-3、2000年、8頁。
- 91 道盛正樹氏からの聞き取りによる。
- 92 山西「[NPO法人 大阪自然史センター] 発足！」N. S. 47-10、2001年、8頁、及び道盛氏からの聞き取りによる。
- 93 那須「自然史博物館の更なる発展を願って—「花と緑と自然の情報センター（仮称）」建設着

- 工一」N. S. 45-1、1999年、10-12頁。「友の会会員には本を5%引きで販売！」N. S. 47-4、2001年、11頁。
- 94 「「大阪自然史センター」の設立と友の会の合流について」N. S. 47-4、2001年、8頁。
- 95 山西、前掲92。「2002年度自然史博物館友の会総会の報告」N. S. 48-3、2002年、7頁。友の会事務局「友の会の規約改正について」N. S. 48-4、2002年、6-7頁、及び山西学芸員からの聞き取りによる。
- 96 特定非営利活動法人 大阪自然史センター「大阪自然史センター教育スタッフ（非常勤）募集要項」<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/npo/koubo.html#Anchor6632556>
- 97 西川氏、白木江都子氏、田代氏、和田学芸員からの聞き取りによる。
- 98 「博物館のひろば」N. S. 45-1、1999年、5頁。
- 99 友の会評議員経験者の中から藤井伸二（大阪市立自然史博物館）、藤井俊夫（兵庫県立人と自然の博物館）、八木剛（同前）、村井貴史（海遊館）の4名が専門職として博物館に就職している。
- 100 兵庫県立人と自然の博物館『館報』8、1999年、73頁、及び、八木氏、NPO法人与自然の会理事の清水文美氏からの聞き取りによる。
- 101 特定非営利活動法人福井恐竜博物館後援会「定款」及び、小島敏弘福井県立恐竜博物館企画主査からの聞き取りによる。
- 102 大阪市「市内主要集客施設入場者数の推移」<http://www.city.osaka.jp/seisaku/project/sinai-sisetuikou.html>
- 103 大阪市「大阪市事業評価システム」<http://www.city.osaka.jp/jigyo/top.htm>
- 104 大阪市「平成14年度 業績評価調書」<http://www.city.osaka.jp/jigyo/data/evaluat/4121200700Y10.pdf>
- 105 樽野博幸「花と緑と自然の情報センター建設」館報26、2002年、1-2頁。
- 106 山西学芸員からの聞き取りによる。
- 107 日浦「人間と科学と教育の関係について」『博物館研究』44-4、1972年、1-4頁。
- 108 千地「新しい地方博物館—とくに自然科学博物館の立場—」館報1、1965年、2-6頁。
- 109 伊藤「日本博物館発達史」伊藤・森田編著『博物館概論』学苑社、1978年、196頁。
- 110 平塚市博物館「博物館の生まれるまで I 経過と基本構想 4. 地域博物館の構想」『平塚市博物館年報』1、1977年、8-9頁。
- 111 浜口哲一・小島弘義「地域博物館における学芸員と特別展」『博物館学雑誌』2-1・2、1977年、1-14頁。
- 112 日浦「研究と展示」館報2、1968年、1-4頁。浜口・小島、同上論文。
- 113 伊藤「博物館と地域—地域博物館観の成立をめぐって—」『平塚市博物館年報』3、1979年、61-66頁。
- 114 伊藤、前掲「地域博物館論—現代博物館の課題と展望」262-263頁。
- 115 伊藤、前掲『ひらけ、博物館』23-39頁。
- 116 伊藤理論が類型化の思想であることに気づかされたのは、佐久間学芸員とのML上でのやりとりがきっかけである。瀧端 [omnh : 010547] 佐久間 [omnh : 010549] 瀧端 [omnh : 010554]
- 117 伊藤「地域博物館の思考」歴史科学協議会『歴史評論』483、1990年7月、2-19頁。
- 118 伊藤、前掲論文。